
柏市戦後史聞き取り集 vol.1

【第1部】松葉町

【第2部】過去の聞き取り調査から

目次

はじめに	今こそ聞き取りを	01
第1部	松葉町の聞き取り調査	
	Ⅰ 松葉町の概略	02
	Ⅱ 聞き取り	04
	筑波高速度電気鉄道・戦後の鴻の巣入植 開拓組合の解散と松葉町の開発 根戸工業団地・北柏貨物駅など 北柏ライフタウン・コープタウンなど 商店会・学校・町会 ふるさと協議会・商店街・祭り 土管・防空壕 柏市のまちづくり	
	Ⅲ 参考資料	13
第2部	思い出を語る、時代を語る（過去の聞き取り調査から）	
	Ⅰ 戦前期の箕輪の生活（風早村箕輪）	18
	Ⅱ 柏郵便局（柏町柏）	20
	Ⅲ 東部14部隊と戦後開拓（田中村・富勢村）	20
	Ⅳ 花野井青年団「不忍池での田植え奉仕」（田中村花野井）	21

例 言

1. 本書は、市域の戦後史に関わる聞き書きを収録した資料集である。
 2. 第1部の聞き取り調査は、令和7年に実施した。
 3. 第2部の聞き取り調査は、昭和55年～平成5年に実施した。その記録を底本とし、趣旨を損なわない範囲で執筆者が加筆・修正したが、戦前・戦中の話が多かったため、その話も2部では収録した。
 4. 聞き書きは、内容を正確に理解してもらうため、発言の趣旨を損なわない範囲で重複や繰り返しを整理し、口語的表現や言い止め表現を適宜文章化した。原稿作成後に、話者または関係者に内容の確認を行った。
 5. 聞き書きの中に、身分・差別用語が使用されている場合があるが、これは、当時の歴史的
事実を把握するため、そのまま用いたものであり、もとより、不当な差別を容認するものではない。
 6. 地名や機関名などは、原則聞き書き当時のものを用い、現在と異なる場合など、適宜（）で補った。
 7. 本文中に掲載した写真・資料の所有者・撮影者などは、各キャプションに記した。柏市教育委員会所有の資料は記載を省略した。
 8. 聞き書きは口語体とし、説明文は「である」体とした。
 9. 引用時は出典を（）に明記した。
 10. 原則常用漢字を使用し、現代かな遣いとした。
 11. 年号は元号優先とし、西暦は適宜（）で補った。
 12. 本文中の「鴻の巣」の地名は、開発名で使用されたひらがなの「の」に統一した。
-
-

自らを知ることの大切さ 「歴史を知りたい、明らかにしたい」という思いは、対象が如何なるレベルのものであれ、自己確認、アイデンティティ確立の欲求に基づき、それが生きる力へとつながるものである。国家や地方団体はいく度も自らの歴史を編さんしてきた。柏市も多くの市町村と同様、明治 100 年を目前に控えた昭和 42 年 (1967) に市史編さん委員会を立ち上げ、資料編・年表編に続き、平成 12 年 (2000) に通史近代編を刊行した。

近代編は終戦までとされ、現代編は別途編さんするとのことだったが残念ながら着手されなかった。私たちの住む東葛飾郡北部は、昭和初年から東京の郊外として変化し始め、昭和 30 年代の高度経済成長期に大きな変ぼうを遂げた。工場の移転・新設に加え、通勤圏が拡大して宅地開発が急速に進み、全国各地から多くの人たちが移住してきた。江戸時代から柏に住んでいた人々だけでなく、柏を第二の故郷とする人々や生れ故郷とする子供たちに、昔の柏だけでなく、どのように変化して現在の柏になったのかを提示することがますます大切になっている。

歴史の材料としての語り 歴史は文字で記された史料、伝来・発掘された資料、言い伝えられてきた語りと記憶、の 3 種の史資料によって明らかになる。文字がなかった時代、人々はモノと語りによって自らの存在を確認する、まさに語り部と伝来品の世界だった。しかし文字が伝わって普及し、文明・文化の進展と共に歴史も豊かになってくる。柏市も市史編さんに際して、記録やモノの収集と共に、昭和 55 年前後と平成 5 年前後の二度にわたって地域の様子や出来事などを聞き取り、記録を残してきた。また、市内各地域で民俗学的な聞き取りを行って報告書を作成し、さらに市民から「戦争体験記」を募集して書物も刊行 (平成 5 年) している。

このように柏市も聞き取り調査を実施して

きたが、全国的な近年の傾向は、聞き取り、オーラルヒストリーがますます重視されてきている。昭和 38 年に政治学研究者が内政史研究会を立ち上げて政治家や官僚たちへの聞き取りを行い、それが政策研究院大学院大学の基盤になり、引退した政治家・官僚の聞き取り調査が行われている。また平成 16 年に社会学などの研究者によって設立された日本オーラルヒストリー学会の学会誌には、興味深いライフストーリーや聞き取りなどの投稿が見られる。聞き取りを一番の資料収集手段としてきた民俗学の研究も、伝統的なテーマに加え、「空き家」などの現代的な問題を採りあげ、盛んに行われている。

今こそ聞き取りを 柏市の過去の聞き取り調査の多くは、戦前の様子や出来事を対象にしていた。柏がもっとも変貌したのは戦後であり、その変貌ぶりを伝えてくれるのは聞き取りであり、それが可能なのは「今」しかありえない。柏は平成 17 年 (2005) に沼南町と合併し、教育委員会文化課は着手されていた沼南町史の編さんを引き継ぐとともに、戦後柏の変遷を明らかにする文献や写真などの収集に加え、聞き取りの重要性を認めてその事業にも着手した。平成 24 年と 26 年に『かしわの歴史—柏市史研究—』1・2 号を刊行し、聞き取りなどを行なって団地や商店街発展の様子などを明らかにしている。この事業はいったん中断していたが、昨年度から聞き取り事業を再開し、ここに松葉町開発の歴史を報告書として刊行できる運びとなった。

市内各地の街づくりや多彩な柏市民のライフヒストリー、さらには市政や行政を担った方々への聞き取りによって、豊かな柏の現代史が明らかになることを願ってやまない。

1 松葉町の概略

松葉町は、日本住宅公団（現、UR 都市機構）による造成がなされて誕生した、柏市域（旧沼南町を含む）の中では新しい町で、入居開始は昭和 56 年（1981）である。高度経済成長期から造成された団地は、柏では入居年の早い方から、荒工山団地（昭和 31 年入居開始）、光ヶ丘団地（昭和 32 年）、豊四季台団地（昭和 39 年）、大津ヶ丘団地（昭和 53 年）で、最後がここであった。ここはもとは、谷津田をはさんで、ゆるやかな畑と山林が散在し、文京区の野球場がある田園であった（『30 周年記念誌』）。

聞き取り調査の履歴 これまで松葉町の様子を知ることのできる座談会や聞き書きは何回か行われている。たとえば、『わが町草創期一松葉町の十余年一』（平成 6 年）や、市史編さん室で行った平成 27 年（2015）の座談会の記録もある。それらは住人による主に町の様子についての語りを中心であった。

今回の調査 今回のものはそういう要素も後半部にはあるが、前半は、松葉町という地域が、どのようにして生まれたのか、また周辺の地域と、どのような関係を持っていたのかということをお話しているところに特徴がある。ここでは聞き取りを理解するために少し補足をおきたい。

松葉町の位置 松葉町の範囲は、右上の図で点線で囲んだ薄いピンク色の範囲である（昭和 31 年の柏市全図に、現在の松葉町域を重ね合わせたものに、周辺の地名と、主要道路と水路を書き込んだもの）。地金堀（昔は小堀〈おっぼり〉と呼んでいたという）が国道 6 号から富勢へ向かう道路と交差するところ（伊藤ハムの工場のあたり）から、堀に沿って北方へ向かう谷の両側（柏公設市場前の交差点まで）と、この図で「鴻ノ巣」と示した丘陵の部分を加えたところである。



松葉町の範囲（櫻井良樹作図）

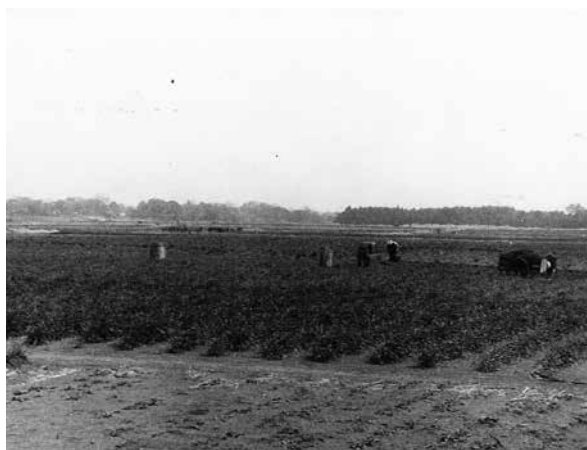
旧町村別では、地金堀の東側が田中村と富勢村である。西側は、南部が柏町（松ヶ崎）、北部は田中村であるが、北部はもともと明治維新後の小金牧開墾によって生まれた十余二村（大正 3 年〈1914〉田中村と合併）であり、その境は鴻の巣の南端にあった。そこには、本文にあるように小金牧の境を示す野馬土手があった。なお現モラージュ柏にあった北里研究所は隣接地区の松ヶ崎である。

都市計画による団地造成 昭和 30 年（1955）に創設された日本住宅公団による団地建設は、当初は従来の町場に接続する地域に住宅を造り供給するというものであったが、やがて土地区画整理方式を導入するだけでなく、都市計画のマスタープランを立てて、まったく新しい街を造成する大規模な宅地造成になっていった。松葉町の団地（開発名は北柏団地）も、そういうもので、賃貸、戸建て分譲、鉄筋中高層ビルディングを含む、総開発面積 109 万 9000m²、計画人口 2 万人のニュータウンであった（以上『日本住宅公団 20 年史』昭和 50 年）。

公団用地となった背景 ここが公団用地となったのはなぜなのか。その理由は判然とはしないが、その一つの要因として鴻の巣地区の歴史がある。そこは、もともと筑波高速電気鉄道計画に伴い、昭和 4 年（1929）に住宅地が造成された、その一部であった（分譲地は現在の国道 16 号西側庚塚まで拡がっ

ていた)。それが鉄道計画の挫折により実現せず、いたところ、昭和13年(1938)に富勢村に高射砲連隊が移駐し兵営をかまえることになると、その演習場として利用されることになったところである。

軍用地から農地そして宅地へ しかし日本の敗戦後、演習場は不用となり、当時の食糧不足対策として全国的に展開された開拓・開墾事業で、払い下げられることになった。齋藤さんの話にある、20戸が地元民と兵士の帰農者に割り当てられ農地となったということである(その一家が齋藤さんのご両親であった)。彼らは開拓農業協同組合を組織して、これにあたった(写真は当時の風景)。この経緯は本書第2部③の「東部14部隊と戦後開拓」でも語られている。



鴻の巣開拓地の風景(昭和35年)

ところがその後の経済発展による産業構造の変化と、近郊都市としての柏の発展が、ここを農地から住宅地に変えていく。早くも昭和35年頃には、京成不動産による宅地開発の動きが生じている(『千葉毎日新聞』昭和35年4月9日号など)。小型分譲住宅では良い街づくりができないということで、住宅公団に開発が委託されると、松葉中学校の記念誌『まつば』(平成2年)は記している(7ページ)。

北柏団地造成と松葉町の誕生 北柏の団地造成に向けての具体的な動きが始まったのは、『日本住宅公団20年史』によると昭和41年(1966)のことで、翌年末には柏市と

の間で開発条件のすりあわせが行われ、不動産業者の介入排除、区画整理方式、事業範囲などが協定された(市長公室企画課「北柏団地全員協議会資料」昭和44年4月30日)。その2年後の昭和43年(1968)1月に開発協議会が設置されている(本文で平川さんが言及している)。開発事務所設立は昭和44年2月のことであった。

区画整理の事業計画認可は昭和48年(1973)で、同年から工事が行われ、それが完了したのが6年後の昭和54年である。その年に松葉町という名前が、市民からの公募で決められた。この地区は、付近一帯が松林であること、松の緑の清潔さ、力強さをなどを表現したものとされている。開拓農協が最終的に解散されたのも同年であった。

本文では、その間の行政と住宅公団との関係や役割について、当時第一線にたって事業にたずさわった平川さんの話が記されている。

造成工事による変化 現在よりずっと谷の深かった地金堀をはさんで、その東西地域が隔絶していたのが、丘陵部を削って水田を埋め立てる工事がなされ、国道16号の開通によって十余二側の地域が分断される傾向が生じたような変化の指摘は興味深い。当時は、花野井から高田方面に抜ける道は、現在の市立柏病院の前から谷へ下り、反対側の丘へと続く道が唯一のものであった。図からも、そのことが理解できる。地金堀を渡るところに宿連寺橋(今の地金堀2号橋)というのがあった。鴻の巣の開拓地の区画もよくわかる。野馬土手も書き込まれている。

また住宅公団による造成が、電鉄系のものにくらべてしっかりしたものであったことや、土地買収が不動産会社が仲介する形ではなく開発協議会を通して行われたことも語られている。協議会は、地主によって構成されていたものである。

北柏旅客駅の開業と入居開始 なお北柏貨物駅の開業は昭和45年(1970)、翌年に常

磐線の複々線化が実現され、千代田線乗り入れとともに、4月に北柏駅は旅客駅となっているので、昭和56年の入居開始時には、北柏駅は利用できた。また北柏駅と松葉町の間には、^{ねど}根戸工業団地があるが、これは公団造成とは関係なく、昭和39年(1964)造成開始、昭和44年完成である。

現在かかえている問題 今回の聞き取りの後半では、今後の課題が語られている。たとえばそれが、住民の高齢化による、5階建て以下のビルのエレベータ設置問題である。

今回の聞き書きでは、あまり団地内部の話については聞くことはできなかったが、団地住民の一体感が強く、夏に行われるお祭りや年越しの行事が盛んであったことに関連して、高齢化により、それが昔のようにはいなくなってきていること、他の団地では建て替えが済んだが、こちらはこれから課題になることなどの将来的な問題についても言及されている。

商店会・自治会、ふるさと祭り 最後の方に、商店会と自治会について話されているが、松葉町には、現在、中心部にマルエツがあるが、昭和63年(1988)に開店された際の話し合いなどについても言及があった。生活に直結する商店問題は、自治会結成にあたっての大きな原動力であったようだ。事実関係だけ記しておくとして、入居開始から3年目の昭和59年に松葉町にふるさとづくり協議会が正式に発足し、昭和62年に近隣センターがオープン、そして昭和63年に、それまで中央商店会が行ってきた夏祭りを「松葉町ふるさと祭り」として行うようになった。

住民動態としては、世帯数のピークは平成6年(1994)で4,252戸14,448人である。

最後の方に、URと市の関係について、職員として公団から派遣されてきた人の存在が大きかったことが話されており、やはり開発行政においてプロの知識が重要であったことがわかる。

II 聞き取り

【令和7年5月15日(木) 於：まつばR】

事務局 文化課では令和6年度より、新たに『柏市戦後史聞き取り集』の刊行事業に着手いたしました。

本市では、柏の通史として『柏市史』を編纂してまいりましたが、平成12年(2000)に刊行された『柏市史近代編』では、その記述が終戦(昭和20年)までにとどまっております。しかしながら、現在の柏市へとつながる大きな変化は、戦後の高度経済成長期以降にこそ見られます。

この重要な時代を実際に体験された方々の声を記録し、後世に伝えていくことは、地域の歴史とアイデンティティを見つめ直す機会となると考えております。今回は、その第一弾として松葉町地域をテーマに聞き取りを行うことになりました。

まず、自己紹介をお願いします。(詳細略、以下聞き取り出席者の項参照)

調査にあたり柏市文化課の職員のほか、市史編さんに関わる委員や、地域にゆかりのある方々が参加しました。

【柏市史編さん委員会参与】

櫻井 麗澤大学教授。柏生まれで、光ヶ丘団地近くで育ち、長年市史編さんに関わっています。

浦久 柏歴史クラブ事務局長。市民団体で長く活動しています。ライターとしての取材経験も活かしていければと思います。

竹島 地域出版編集者。昭和46年(1971)に柏に移住し、流山の出版社「^{らんしよぼう}崙書房」を経て独立。地域の書籍を多数手掛けています。

上山 國學院大学名誉教授。長年市史編さんに関わり、柏市史の近代編を担当。戦後史の調査を以前から働きかけてきました。

【松葉町にゆかりのある方々】

齋藤 昭和29年(1954)生まれで、松葉町で文具店とビル管理業を営んでいます。両親

は、今日のテーマの一つになっている「十余二」・「鴻の巣」に入植した農家で、私はその鴻の巣で生まれ育ちました。学校を卒業して、地元企業に4年ぐらい勤めた頃に起業し、独立しました。ちょうど松葉町の商店会をつくろうという時期でした。12店で松葉町商店連合会をつくり、私は4代目会長を11年務め、一度お役を他の方に渡しましたが、昨年から再度会長となり、今に至っています。

平川 花野井の出身で、昭和19年(1944)生まれです。水田や畑や山林であった頃の松葉町を見てきました。祖父は細かい人柄で(笑)、手帳に日誌をつけていました。たとえば布施弁天の周辺に洪水があったとき、階段の9段目だったかな、そこまで水が入ったとか。なので柏の歴史の何かのお役にたてるかなと、親や祖父が残してきた資料を、市史編さんに寄贈させていただいています。私自身も柏市役所に勤めていて歴史に興味があったので、地域の資料などを残してきました。同時にいろいろなものを見てきたので、記録に残す活動も続けていきたいと思っています。

筑波高速度電気鉄道・戦後の鴻の巣入植

事務局 最初に「筑波高速度電気鉄道」と戦後の鴻の巣入植について、皆さんにお聞きできればと思います。昭和初期に東京と千葉北部・茨城県を結ぶ鉄道構想と、それに伴う大規模な宅地開発が現在の松葉町周辺に持ち上がりましたが、このような計画があったことを、育ててこられたなかで聞かれたことはありませんか？

平川・齋藤 いえ聞いたことはなかったです。

上山 筑波高速度電気鉄道は、戦前に今のつくばエクスプレス(TX)と同じような構想を描き、鴻の巣の駅周辺では一区画300坪くらいの宅地を分譲するまちづくり計画を立てていたようです。しかしこの計画は頓挫し、土地は陸軍の演習場となって、戦後に開拓地として入植が始まりました。

櫻井 陸軍からこの土地を引き継いだのは

「新那須興業」という会社であったのではないですか。

齋藤 それが複雑になって裁判になったみたいですよ。

平川 ああ、新那須興業という名前は聞いたことがあります。

上山 つまり、もともと別荘予定地だった場所が、戦争で軍用地になり、戦後開拓地として使われることになったということですね。そして、元の地権者と入植者の間で、いろいろな問題が起きたと。

齋藤 その通りです。ですからこの土地をめぐるって、裁判まであったんです。うちは昭和20年(1945)戦後まもなくに入植した組です。父がその時の新聞記事をとっていましたので、今日は持ってきました。(「柏市民新聞・昭和35年5月15日号」と「千葉毎日新聞・昭和35年4月9日号」)

櫻井 昭和35年の千葉毎日新聞に「農地の売り渡し強要」といった



毎日新聞千葉版(昭和35年4月9日)

齋藤敏文提供

記事が載っています。

齋藤 うちの父親は大正7年生まれで、山梨県出身。富勢連隊とみせに3年間所属した職業軍人です。当時、連隊近くの花野井に下宿し、そこで地元の娘(齋藤氏の母親)と出会い、結婚したそうです。

鴻の巣の開拓には、父親を含め「元軍人10人と地元住民10人」の計20人が参加したのです。開拓地は、交差点(消防本部の裏)の東側が元軍人、西側が地元住民でそれぞれ入植しました。開拓地はもともと松林だったので、鍬を持ったことのない人にとっては大

変で、開拓者の中には転居した人もいたようです。鴻の巣の墓地に「鴻の巣開拓記念碑」が建立され、その文章を私の父（大正7年〈1918〉生まれ）が書きましたが、鴻の巣の精神が表現されているような気がします（本書13ページに掲載）。

上山 話は変わりますが、北里研究所はどの辺にありましたか。

齋藤 現在のショッピングセンター（モラージュ柏あたり）の場所にありましたので、開拓地とは異なります。十余二は北里研究所のアプローチ部分だけで、研究所は松ヶ崎分でした。子供の頃、研究所から馬などを焼く重油の匂いが、南風が吹いたときにうちの方まできましたね。

上山 開拓地は、林だったのですか。

齋藤 はい、軍隊の用地かどうかは分かりませんが、林（山）でした。柏第四小学校の裏手の山から松ヶ崎にかけてはずっと山。山を切り開いて国道16号を造った地域で、もともとは松林がずっと広がっていました。現在のビックカメラやモラージュ柏の辺りも全部山です。私は第四小学校に通っていましたが、山の中のけもの道をショートカットとして通っていました。

平川 今話している場所に、「野馬土手（のまどて）」の跡があるんですね。なごみの米屋という菓子店の駐車場とモラージュ柏の境のところに少しだけ残っています。



現存する野馬土手（令和7年）櫻井良樹撮影

櫻井 花野井側から見て、開拓に伴う変化はありましたか。

平川 特になかったと思います。花野井地区から松ヶ崎へ渡るには川がありましたから、そこを越えて移動するのはなかなか難しかったです。なので、鴻の巣の方へはほとんど行かなかった。ただ1つ覚えているのは、子どもの頃、高田にある熊野神社くまのじんじやへお参りに行く際には川を渡り、鴻の巣を通過していったというぐらい。

竹島 その川というか小川のことを、地金堀と呼んでいらっしゃいましたか。

平川 いや、地金堀のことは、昔は「おっぼり（小堀？大堀？）」と呼んでいて、松葉町になってから地金堀というようになったんです。

上山 花野井側と鴻の巣側は、人の行き来もあまりなかったのですね。

平川 そうです。戦後の開拓地である鴻の巣と、もともとあった花野井の住民は、ほとんど交流がありませんでした。入植者が「兵隊さん」（戦後の開拓団員）だったため、地元農家とは馴染みがなかったのだと思います。

開拓組合の解散と松葉町の開発

櫻井 昭和54年（1979）の開拓営農組合の解散時期が、松葉町の団地開発が本格化する時期ですね。組合が解散する頃には、ほとんど開発が始まっていたと思いますが、開拓の農地を市に売り渡したのですか。

齋藤 いいえ、公団です。

上山 そもそも言い出しっぺは誰ですか。

平川 入植者20人の中の1人に、戦時中は兵隊さんだっただと思いますが、不動産業をされている人がいらっしゃいました。農家の人たちはひと味違っていたので、先に立って、土地の開発をやろうじゃないかという話が出たのです。

上山 昭和40年（1965）～43年くらいからそういう話が出ていますよね。時代は高度成長期になっている、しかしその中で取り残されつつあるというような認識から、開発の話が出てくるわけですね。



区画整理前の松葉町（昭和40年頃）齋藤敏文撮影

平川 その人は、復員してからここへ住んで不動産の仕事がされていた。世間のことをよく知ってる人だから、住宅公団とも最終的には話がついて「じゃあ、ここを開発しようじゃないか」となったそうです。そういう話ができると土地を売る人や貸す人もいて、賛同を得られたんでしょう。

齋藤 そうですね。

平川 それで、「鴻の巣だけじゃなくこれを広げていこう」と住宅公団に話をした。そうしたら、住宅公団は市と交渉をせずずっと広いところを先買ひして、反対する人や土地を残したい人はそのままにして、今でいう土地区画整理事業をやろうとしたんです。その区画整理事業をやるには、まず役員さんがいなくてはしかたないので、主だった地主さんが役員になって、昭和43年(1968)に北柏地区開発協議会をつくりました。

区画整理というのは、皆さんご存じと思いますが、土地を売りたい人から買うんです。たくさんあった方が、施工者としてはやりやすく、当時はかなり買えました。大堀川の周辺に土地がたくさんありましたが、水源が悪く、農家の人たちはもう手作業で米作りを続けられなくなっていました。そういう状況で子どもたちを学校に行かせなきゃいけない、家も建て替えなきゃならないなどの事情が重なって、土地は次々と売られていったわけです。この土地を住宅公団は直接買うのではなく、開発協議会を経由して買うシステムでした。

櫻井 この鴻の巣の戦後開拓後の地図、本当に土地がきれいに割り振られ区画が区切られていますね。一反ずつ長方形に割り振られている。戦後の入植は、すごい計画的だったんですね。

平川 それで、この地図を持って土地売買の交渉に行ったわけです。昭和43年、松葉町団地を開発するとなった頃ですが、私はその開発協議会の事務をやっていたのです。

櫻井 その頃、平川さんは地元の出身だから、農家や地主さんの情報にも詳しくだったということですね。

平川 そうですね。誰が地主かなどは全部把握していました。まず地元不動産屋が動き始めたのですが、話をまとめるには市役所が間に入らないとどうにもならない。

櫻井 市役所が仲介^{つな}に入って、日本住宅公団と地主を繋いだんですね。

平川 直接交渉だと時間もお金もかかりますから、市役所が間に入ることで買いやすくなるんです。仲介というより、話をまとめあげるといえるのかな。現金に替えるために土地を売った人もいますが、区画整理に賛成して、減歩^{げんぶ}を選んだ人もいます。一般にいう4割減歩——4割減らされて、残りが宅地になって戻される方法です。

櫻井 鴻の巣だけでなく、北柏駅の方まで開発が広がっていったのもその時期ですよ。伊藤ハムがある工業団地も、もうすでにあり



聞き取り調査の様子（令和7年）

ました。

平川 そうですね。使いづらかった川沿いの土地もうまく使っていました。

根戸工業団地・北柏貨物駅など

平川 根戸工業団地と、それに付随して建設が予定されていた北柏貨物駅（現北柏駅）についてお話しします。

当時は北柏駅ではなく北柏貨物駅だったんですね。やがて、自動車輸送の普及により貨物駅の計画が変わり、昭和46年（1971）4月に常磐線の複々線化が実現し、北柏旅客駅が誕生しました。ある市議会議員が中心になって、北柏貨物駅を旅客駅にしてほしいという働きかけをされたこともあり、常磐線の複々線化工事に合わせて旅客駅としてオープンしたんです。この複々線化によって、柏駅のホーム増設や快速電車の停車、南柏駅の東口開設などが進み、当時の柏の街は、大きく沸き上がりました。

当時は、「463、463（ヨンロクサン、ヨンロクサン）」と皆が言っていました。昭和46年4月に駅がオープンした後、私は当時の市役所職員として、県庁や公団、鉄道会社などとの交渉の様子を見ていました。

櫻井 昭和46年4月だから1カ月開業が遅れたのかな。



北柏駅貨物駅（昭和45年）

北柏ライフタウン・コープタウンなど

櫻井 北柏地区開発計画における地元の人たちの意向や市の関わりなどについてはどうでしたか。

平川 当時の市の職員は、大規模な区画整理事業の経験がほとんどありませんでした。地主の意向は、区画整理への参加を希望する声が多かったと思います。

宿連寺や根戸の高野台の地主さんには、自分たちのところも区画整理区域に入れてもらいたいという意見もありましたが、すでに住宅地となっていたため、賛成する人もいれば反対する人もいるという状況でした。鴻の巣の区画整理が成功したのは、住宅地はありましたが、ほとんどが農地や山林だったので区画整理を進めやすかったのだと思います。

一方で、土地の中に川が流れており、地下水をどのように排除するかという問題がありました。住宅公団はきっちり堀を縦横に掘り、地下水をそこへ集めてくみ上げ、地下水対策をきちんとやったおかげで、この地域で地盤沈下や洪水になったことはありません。私は、今柏の住宅地の中でも、とても恵まれている地域と感じています。

齋藤 私が中学生の頃はこの辺りの団地を建てるために、毎日うるさいぐらい杭を打つ音が聞こえました。また、松葉町のこの辺りは田んぼでしたが、鴻の巣の山をブルドーザーで崩し、いい土をぼんぼん入れて土地をなだらかにしました。

平川 この川は、私が小学生のころは夏休みに魚取りをして、鰻うなぎがとれたんですよ。

齋藤 そうそう、清水が湧いているところで鰻がとれるんです。海に戻らない鰻がいるんです。

上山 やはり、ここにも鰻がいたんですね。団地の杭打ちがうるさいぐらいだったと聞いて、工事の規模の大きさがわかります。

平川 はい、ここは地盤が強化されてしっかりしていたから、高層団地もどんどん建てられました。ただ、7階以上はエレベーターをつけただけ、エレベーターのない3階建てや5階建てがあり、今後の住み替えの課題になっていると聞きます。

ただ、戸建ては話が別で、宅地はいいんで

すね。建設された時期は戸建ての6丁目が一番古い。それに昔は北柏駅に行くには不便だった6丁目・7丁目は、つくばエクスプレスができて便利な場所になりました。

櫻井 豊四季団地は中層の4、5階建てばかりですけど、松葉町はそういったものもあるけれど戸建ての分譲地もありますね。

上山 それはURの意向ですか。

平川 いや、地主さんの意向といった方がいいかもしれない。換地^{かんち}して宅地を戻してもらうんですね。そのあとは売ったり、住宅公団が戸建てを建てたりとか、いろいろです。

上山 そういったことができる広さがあったような印象がありますね。豊四季団地なんかの何倍もの面積がありますね。

櫻井 換地などを含む開発は公団がやったと思いますが、その下でいくつかの不動産屋が関わったということはありませんか。

齋藤 ほとんど公団です。大手の不動産屋が関わったという話は聞いたことないですね。だから一番最初の昭和40年代の終わりの方の6丁目の戸建てはすごい倍率で。30倍とかなんかになったようですね。



北柏土地区画整理事業竣工式（昭和55年）

提供：UR都市再生機構

平川 そうです。区画整理事業によって、鴻の巣というところは土地が活用できるようになった。すぐに売却しないで自分で持って貸せる土地をつくったり、あとで売れる土地をつくったんですね。

齋藤 ただ、もう少し深く掘り下げますと、鴻の巣の20軒のうち10軒は地元の人です

から、農業する腕がありました。だから売らなくなかったんですね、農家をやらしてくれて。うちの父なんかよく説得に行ったらいいです。職業軍人で入植した人は土地を売ることや農業をやめることに賛成、農家の人たちはむしろ反対。ここでカブをたくさん作っていたんですね。カブを昼間とって夜に築地まで車で運んでいたんです。そういった農家が何軒かあって、やめる話のときには涙を流した人もいたと聞いてます。

商店会・学校・町会

事務局 ここからは松葉町の商店会についてうかがいます。

齋藤 「点在しているけど、みんなで情報交換しようよ」とつくったのがうちの商店会です。よね寿司さんとかネモト酒屋さんとか、戦後入植した地元の人たちと昭和56年(1981)に12店舗でつくりました。ケーキ屋の樹杏さんは最初から入っています。よそから「ここがいいかな」と思ってお店を始めたと言われていました。

櫻井 松葉町にバスを通すという話が出たとき、すんなりといきましたか。東武バスですよ。

平川 はい、最初からバスを通すつもりで、循環ができるような、つまりUターンしなくてもいいような造りになっていたと思います。まちづくりのプロが地形に合わせた格好で考えていたんですね。ただ、今のようにつくばエクスプレスが開通し、柏の葉キャンパス駅からこちらにくるのはちょっと不便なんですね。お客さんも向こうへ行きたいんですけど、日中は1時間に1本ぐらいしかないもの。

上山 住民の方々が生活をいかに成り立たせていくか、便利にしていくかで苦労されたと聞きますが、その点はいかがですか。

齋藤 特に鴻の巣の20軒は同時に入植したので、懐具合^{ふところぐあい}はみな同じだったと思います。みなで苦労して街をつくっていかうということで、開拓記念碑にある開拓組合は役所との

折衝^{せつしょう}やなんかも、鴻の巣の会館で夜中まで議論したと聞きました。そのうち皆忙しくなり、昭和20年の入植当時からずっと元旦10時と決めて新年会を開催していたそうです。コロナ前までずっと続いていました。

上山 鴻の巣地区の開拓者と新しく入ってきた住民との間に問題はなかったですか。

齋藤 鴻の巣地区には現在180世帯ぐらいあるんですけど、そのうち20世帯が旧住民ですが、まったく問題はなかったです。基本的に歴史は浅いので新住民を受け入れることに柔軟でした。

上山 昔の公団って、倍率もすごかったし、所得制限があって住みたい人が住めないことがありました。松葉町も、初期の公団と同じようだなと思いながら話をうかがっていました。

平川 そうですね。住んでいる人は、名の通った企業などに勤め、豊かな人ばかりだったんです。ですから、周辺に住んでいる人たちの中には、教育熱心な松葉町の学校に子どもを入れたいって希望されるケースも多かったんです。

櫻井 鴻の巣と松葉町では、学区は一緒なんですか。

齋藤 はい、一緒です。松葉一小、二小、松葉中学。

浦久 松葉町には近い場所に2つの小学校があります。2校とも、存続できるぐらいの児童数ですか。

齋藤 松葉第一小も第二小も、今でも1学年3クラスくらいあるから、子どもたちは十分いますね。逆に、全体的な子供の数は減っているの、周辺の花野井辺りは学校が閉校するかもしれないって地元では心配する声もあるくらいです。

事務局 松葉地区は若い世代が増え、以前から学力が高い地域として知られています。

上山 交通の便はそんなに良くないという話も聞きますが、それでも人気なんですね。

齋藤 そうですね。ただ、私は今、東十余二

町会の役職やふるさと会館の運営委員長をやっているんですけど、国道16号が通っていることで、コミュニティが分断されていることが非常に問題だと思っています。同じ町会でも情報が伝わりにくくなったり、学校も学区もみんな違う。16号による分断はありますね。

事務局 東十余二町会、若柴町会なども分断されています。

平川 柏の葉ができて、さらに町会の分断が進む懸念があるんですよ。

上山 なるほど。教育の良さで人が集まる一方で、幹線道路による分断といった課題も抱えているということですね。

齋藤 松葉町の公園はもともと文京区が所有していた土地で、テニスコートなどがありました。

櫻井 戦前の話ですか。

齋藤 いや、昭和44年(1969)～47年にもありました。

事務局 造成後も文京区が所有していたのですか。

齋藤 造成後もかなりの期間所有していたと思います。その後、戦前からあった戸張へ移転する際に、この土地を手放しました。

平川 戦時中に都内の学校が疎開するために、この土地が疎開先の学校用地として使われたのではないかと思います。

ふるさと協議会・商店街・祭り

事務局 ここからは、松葉町のふるさと協議会などについてうかがいます。

齋藤 松葉町のふるさと協議会はしっかりしてるんです。周年記念誌なども作っています。

上山 そうなんですね。小中学校の記念誌も素晴らしいと思いました。あれは、地域全体で子供たちを大切にしている証拠ですね。新旧住民の対立がないっていうのも、すごくいいですよ。

齋藤 まさに！みんな松葉町が好きなんで

す。お祭りも盛んで、商店会で花火も打ち上げてるんです。

事務局 ふるさと協議会もまとまっているし、鴻の巣に入った20軒と新しく来た人もうまく溶け込めたということですし。

平川 柏でもこれだけまとまっているのはこしかなないんじゃないかと思えるぐらいです。でも、これからが大変ですね。低層住宅の建て替えとか、空き家対策とか。誰が中心になってやるのかというのが問題です。

齋藤 そうですね。商店街も以前はもっと活発でした。

上山 今は商店街も大変になってきてるんですね。

齋藤 そうです。商店街も以前はもっと活発でした。ダイエー（現マルエツ）が出店するとき、大型店舗法という法律があり、昭和59年に北柏ショッピングセンターとダイエーの大型店対策委員会を設置したんです。その時は随分夜遅くまで話し合いをし、出店する代わりに商店会に入ってもらうことになりました。ここのマルエツさんもうちの商店会に入ってもらって、商店会費も払っていただいています。

近頃は、近隣にモラージュ柏や16号沿いに郊外店やドラッグストアもたくさんできて、松葉町の商店街はあまり元気じゃないですね。URの家賃も高いままで、テナントもなかなか入ってこなくて、昔のような活気がなくなっているのが現状ですね。

平川 どこの団地の商店街も同じような課題を抱えてるみたいですよ。

齋藤 ええ、大津ヶ丘の商店街も解散したって聞きました。

事務局 松葉町ふるさと祭りの経緯や、昔と今でどう変わったのか教えていただけますか。ふるさと祭りは柏まつりの次に大きいと聞きますが。

齋藤 祭りは、ふるさと協議会が中心になって、「みんなでやろう！」という盛り上がりから始まりました。当時は、子ども神輿をやっ

たり、住民みんなで作って上げていくパワーがすごかったですね。祭りは去年で40回目を迎えました。

櫻井 商店会は最初から協力していたんですか。

齋藤 はい、商店会は当初から花火で協力し、現在は京葉銀行の横のステージで柏のミュージシャンを呼んでライブステージもやっています。あと祭りとは離れますが、鎮守（神社）をつくろうという案もありました。ただ、宗教的な問題があるので、実現できませんでした。

事務局 ふるさと協議会ができてから、まちとしてまとまって活動するようになったんですね。

齋藤 当初はまつば中央商店街が音頭をとってやりましたが、ふるさとづくり協議会ができて移管しました。新型コロナウイルスが流行した時期に3回中止になりましたが。

櫻井 ふるさと協議会ができる前は、自治会はなかったのですか。

齋藤 自治会はありましたが、松葉町地域ふるさとづくり協議会という組織ができて初めて、松葉町全体でやるようになりました。1丁目から6丁目まで、みなさんで役員会の役員を選びました。

事務局 あと、大晦日のカウントダウン。平川さんがここで暮れに火を焚いて、カウントダウンを5年以上されていたんですね。

平川 そうです、神社がなくてお参りができないので、1m50cmぐらいのステンレスのお皿をつくって「かがり火」を焚き、広場に2個も3個も置いて、お祭りみたいにやっていました。鎧兜も飾ったりして。

齋藤 やぐらの前でみんなで踊ったり、町会ごとに屋台も出していました。2日間で7、80万円も売れたほど賑やかだったんですよ。ただ、残念ですが、今はもうやらない町会も出てきました。中心になっていた人たちが、みんな高齢になってしまって、出店していた町会もだいぶ撤退してしまいました。

上山 協議会の会長はそれぞれの町会の代表者が集まって、決めるのですか。

齋藤 はい、総会をやって、ふるさと協議会に勤めている役員を町会から出向させます。

櫻井 そういう方々の中から、市議員をたてようとかするような、政治的な活動はなかったのですか。

齋藤 あまりなかったですね。「1人出そうよ」という話で盛り上がるんだけど、具現化しなかった。みんな政治色や宗教色を嫌う傾向があります。

事務局 昔ながらの旧家が少ないし、サラリーマンが多いから、そういう雰囲気になるんでしょうか。

齋藤 そうですね。ですから、商店会が花火やライブステージを主催したり、町全体で楽しめるイベントを重視しています。



松葉1小に移設、再利用されたヒューム管
(平成22年1月) 浦久淳子撮影

土管・防空壕

浦久 話は変わりますが、松葉一小的「土山」に使われている土管どかんについて、昔の陸軍柏飛行場または跡地の開墾の際に設置されたものだと言ったことがあります、ご存知ですか。こんぶくろ池自然博物公園で保存公開されている秋水燃料庫しゅうすいより、少し小型のヒューム管です。

齋藤：直接は見たことがないですが、この辺にはないものなので、飛行場跡地から持ってきたものかもしれませんね。そういえば、う

ちの畑だった今の店舗の場所には、訓練用のH型の防空壕がありましたよ。土を掘っただけのものです。

櫻井 それは、昔の演習場の名残ですか。

齋藤 はい、そうです。消防本部の少し下にも、同じように土を掘っただけの防空壕が2カ所ありました。きっと軍人が掘ったのでしょうね。

上山 今の消防本部ですか。

齋藤 はい、今の消防本部の裏手です。昔は谷津田やつだ(谷あいの田んぼ)でした。

事務局 鴻の巣の土を全部押し出して、一帯をなだらかに造成したんですね。

齋藤 そうですね。ブルドーザーで押しちゃったから、昔とは地形がだいぶ変わりました。

柏市のまちづくり

平川 まちづくりについて少し補足します。URなどにはまちづくりのノウハウがやはりあって、昔はUR都市機構から柏市に職員を派遣してもらっていました。三代前の本多市長は東京大学の都市工学出身だったんですが、私が都市計画部の部長の時は、やはり東大の都市工学を出てURに入った人が次長として派遣されていました。

上山 URから市役所への人の派遣は、あちこちでされていることなんですか。

平川 はい、そうです。市役所で育った人とは全く違う視点を持っていて、国や県との交渉もしてくれるし、重要な役割を担ってくれました。

櫻井 そのURとの連携は、今も続いているんですか。

事務局 はい、平成28年までは柏市からURに職員を派遣しており、人材交流は続いていました。

それでは、お時間となりました。本日は、貴重なお話をありがとうございました。

III 参考資料



鴻の巣開拓記念碑

昭和二十年八月十五日 第二次世界戦争終結し
 復員した東部第十四部隊出身者並びに旧田中村在
 住近隣の子弟帰農者二十名により 元練兵場たる
 鴻の巣地区の開拓に入植する
 戦後の混乱の中 荒野をあらゆる困難と戦い 一畝
 一畝に精魂を込め耕すこと数年 一物の収穫もない
 粗野を肥沃の地となさしむ 爾来幾星霜 時の流れ
 と共に都市化され 昭和五十四年開拓宮農事業も
 発展的に解散となる
 茲に開拓記念碑を建立し 永く開拓を記念する
 昭和五十八年十二月吉日建之

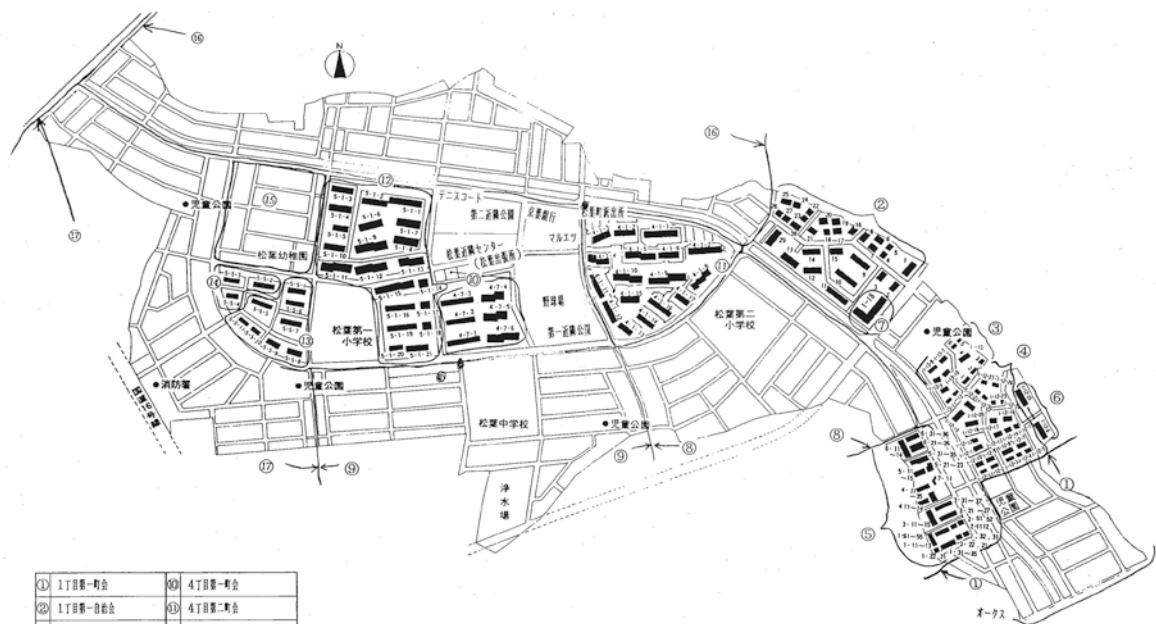
斎藤 山沢 倉橋 伊藤 小林 石井 加藤 斎藤 平山 矢野 浅野 鈴木 米村 中里 増田 小沢 田口 鈴木 染谷 江原 石工
 清 金 政 英 正 作 良 邦 照 正 智 辰 和 文 正 三 城 岩 松
 丸 石 材

※「巢」「歸」「齋」「沢」「橋」は本来は旧字

鴻の巣開拓記念碑写真と翻刻



松葉町付近航空写真（昭和30年〈1955〉10月13日 米軍撮影 USA-M1226-28 国土地理院）に加筆



① 1丁目第一町会	⑩ 4丁目第一町会
② 1丁目第一分団会	⑪ 4丁目第二町会
③ 1丁目第二団地管理組合	⑫ 5丁目第一分団会
④ 1丁目第三団地管理組合	⑬ 5丁目第二住宅管理組合
⑤ コーポタウン北柏	⑭ 5丁目第三町会
⑥ ライフタウン募集住宅	⑮ 5丁目町会
⑦ グランヴィル松葉自治会	⑯ 6丁目町会
⑧ 2丁目町会	⑰ 7丁目町会
⑨ 3丁目町会	

松葉町全体図

松葉町全体図『創立10周年松葉町はこんな街』



北柏ライフタウン松葉一丁目募集棟 提供：UR都市機構

〈環 境〉

充実した施設、高台のリッチな暮らし。

北柏ライフタウンは、公団の土地区画整理事業（開発面積約110ha、計画人口約20,000人）により住宅地として開発され、美しい自然をとり入れた街づくりが進行中です。すでに、3年前から入居が始まり、約1,400世帯の人々が快適な暮らしをしています。

タウン内は、人と車を分離させた歩行者専用道路、大小の公園、教育施設を始めとした日常に必要な諸施設が完備され、あくまでも住む人を大切にしたい計画的な配置がなされています。

また、周辺には、大公望の腕が鳴る手賀沼、野球場、テニスコート、バレーコート等をもつ総合運動場などがあり、週末は健やかな汗を流すことができます。



戸割店舗

〈交 通〉

北柏から大手町へ一直線、48分。

団地から、地下鉄千代田線北柏駅へバスで5分、歩いて18分。

北柏駅から柏駅へ1駅で3分、大手町へは千代田線で直通48分。上野へは柏で常磐線快速を利用して33分、上野で地下鉄銀座線に乗り換え銀座へ45分、都心へはいずれも1時間足らずという便利です。



※所要時間は乗換人時間および待ち時間を含みません。

●案内図



〈募集概要〉

昭和58年第7回北柏ライフタウン松葉町一丁目団地

- 所在地／千葉県柏市松葉町一丁目12番
- 交通／地下鉄千代田線北柏駅下車「北柏ライフタウン循環」バスで5分「コープタウン前」バス停下車徒歩3分、又は、北柏駅下車徒歩18分。
- 募集戸数／3LDK 59戸（建設戸数60戸）
※募集戸数は建設戸数から管理連絡員住宅を差し引いたものです。
- 間取り／3LDK ⑤・⑥ 和室6畳2室、洋室4畳大、居間兼台所・食事室18畳大。⑦タイプのみ専用庭付。
3LDK ⑧・⑨ 和室6畳2室、洋室4.5畳大、居間兼台所・食事室18畳大。⑩タイプのみ専用庭付。
- 入居予定時期／昭和58年8月下旬。

●配置図



※住戸番号は①～⑩の順にふられています。



北柏ライフタウン内装 提供：UR 都市機構

【参考文献】

松葉町十年史刊行実行委員会『わが町 草創期——松葉町の十余年——』（平成 6 年）
松葉町地域ふるさとづくり協議会『松葉町はこんな街』創立 10 周年（平成 7 年）
創立 20 周年（平成 17 年）、創立 30 周年（平成 27 年）

ここでは、柏市教育委員会が昭和55年(1980)から平成5年(1993)までに行った聞き取り調査のうち、4人の方の要約を紹介する。

これらの聞き取りは、『柏市史 近代編』(平成12年)や『続 柏のむかし』(昭和56年)などの参考資料として、また『歴史アルバム かしわ』(昭和59年)ではキャプションの一部としても使用された。

今回、『柏市戦後史聞き取り集』が刊行されるにあたり、過去の聞き取り調査の記録の一部を読むことになった。当時の担当者が要約した紙ベースのもので、一つ一つは短かったが、物語られた話はその頃の時代や生活を彷彿とさせた。地域に長く住んだ方が実際に見たり聞いたりした、身近な歴史である。今、多くの方々に読んでいただきたい。

なお、調査から時間がたち、掲載許可をとるのが難しかったため、③「東部14部隊と戦後開拓」を除き、氏名は仮名とした。また、記憶に基づいた思い出で、事実とは異なる点があるかもしれない。ご意見をいただきながら、より正確なものにしていければと思う。
※文中の()は、要約した当時の担当者または今回編集作業を行った筆者が補充した。

1 戦前期の箕輪の生活

Tさん (大正14年生まれ、女性)

聞き取り：平成5年(1993)6月

大正14年(1925)に、千葉県東葛飾郡風早村箕輪(旧沼南町)に生まれました。生家は医院を営んでいて、男女の使用人がいました。大井の小学校(尋常科)に、その後は塚崎(高等科)に通い、卒業後は松戸高等女学校に進学しました。

箕輪とその周辺 箕輪という土地は台地なので、どこへ出るにも必ず坂で、交通は大変不便でしたが、手賀沼が増水しても浸水の心

配はありませんでした。昭和10年(1935)頃に起きた大洪水では、ちょうど坂の所まで水がきました。

箕輪から県道へ出るまでの村道は、両側が山だったり、「ささめ(蓑の原料)」がずっとはえているような、大変さびしく、悪い道でした。幅は2メートルくらいだったでしょうか。

柏には女学校へ通学するようになるまで、あまり通う用事ありませんでした。買い物は肉屋とか、家業の医者で必要な薬とか、沼の対岸にある我孫子へ行きました。お使いは女の子の仕事と決まっていて、姉妹2人ぐらいが連れ立って、沼の渡し(手賀沼の渡し舟)に乗って出かけました。

手賀沼はよく増水するので、農家では農具の一つとして必ず「サツパ舟」をもっていました。田んぼに水がかぶると、そのサツパ舟に乗って稲の穂先を刈り取ったり、また沼を渡るときなどにも使いました。

付近の集落(大井・五条谷・箕輪・岩井など)には、一つずつぐらいの渡しがありました。渡し舟はサツパ舟のような、5、6人が乗ればいっぱいになる簡単なもので、事故が多くありました。手賀沼は「魔の沼」と呼ばれていたくらいです。



サツパ舟での渡し(昭和28年)

渡しに乗って10日に1度ほどの割合で、取手の和菓子屋がやって来ました。利根川の鉄橋が早くからできていたので、自転車でも

わってきていたのです。もともと取手は古い町で、この辺では仏具や漆器を買うときは大きな商人のいる取手に出かけていました。特に生家は医者だったので、破傷風の血清や、伝染病の薬は、我孫子より大きな取手の卸しの薬屋から、取り寄せていたようです。

当時の道路の様子 松戸の女学校へは柏まで自転車で出て、鉄道を利用して通っていました。女学校に通う頃には（昭和13、4年頃か）、ずいぶん道も整備されたように思います。柏への道は途中から県道で、幅は約4メートル。あとの時代でいえば、バスがようやく通れるくらいです。冬は霜解けの泥がひどくて、泥をかき出すのに必要な篠竹を必ず持っていたくらいですが、それでも村道よりはずっと通りやすかったです。



商店前のバス停（昭和期）

県道と村道との違いは砂利の量とその大きさで、県道には細かい砂利がたくさん敷いてあり、雨が降ったあとのぬかるみ加減が村道よりはるかに良かったです。ただの土の道だと深い水たまりができて、牛車や馬車が通るとひどく水がはねました。村道のように石が大きいと車輪がとられて危ないし、石の隙間がどんどん削られて水も溜まります。

ただ、県道が良いといっても程度の問題で、客観的にみるとやっぱり悪路でしたから、東葛飾中学に通う男子などは「悪い道なら短い方がいい」と、田んぼの中の道を通って近道をしていました。これは大井から別れた道で、大津川にかかる「かち（徒歩）橋」を渡る農道のようなもので、リヤカーがやっと通

れるくらいだったと思います。

柏への道と手賀沼舟運 私が女学校に通う頃は、たいていの人が自転車で柏まで通っていて、通学の行き帰りに勤め人や学生とよくすれ違いました。小学校高学年になったあたりから、学校に通う人が増えた記憶があります。柏までは自転車で50分くらいかかり、天気の悪いときは本当に大変でした。それでも洪水のとき、中の橋ぎりぎりまで水がきても何とか自転車で通学できる状態でしたから、道路はかなり改修されたといえます。

柏までの道には「中の橋の坂」「刈込の坂」「新田原の坂」など、坂がありました。長くてきつい坂で、現在はあいかわらず長いけれども、勾配はずいぶんゆるくなりました。昔はここに来ると、自転車からみな降りて押して、馬車も馬方は降りてからのぼっていました。下りも石があるので危ないから、気をつける必要がありました。

柏までの道を行く人が増えたのは、手賀沼の渡しが危険だったからです。手賀沼に橋が架かったのは戦後のことです。当時は変死することなどあまりなかったのですが、沼で舟が転覆すると5～6人からの人が一度に亡くなるのでずいぶん恐れられていました。父が検死をしていたのでいろいろ思い出があります。

昭和8年の春、突風のため舟が転覆し、我孫子のゴルフ場のキャディーら6人が死亡しました。ちょうど春の彼岸の頃に風が強かった……。また19年には、小学校の先生が我孫子の会議を終えて手賀に渡し舟で渡るおりに、18人くらい一度に亡くなる事故がありました。沼には背の高い藻がはえていて、うまく泳げません。

ちょうど小学校の先生の事故があったころ、父の往診は馬をつかっていたのが自転車にかわったことも覚えています。

II 柏郵便局

Yさん（男性）

聞き取り：昭和59年（1984）3月

私が柏郵便局に入ったのは昭和11年（1936）で、その後40年いました。私が入った頃、柏局は特定局でした。特定局とは通信省の直轄ではなく、その土地の人に委託したものであり、いわば被委託者の私有財産です。たとえば切手を売るとその歩合をもらうという具合です。

その頃の職員は局長を含めて22~23人。配達区域は柏町、風早村、田中村の1町2村でしたが、自転車は電報用の1台しかなく、あとは自分のものを使うか、歩いての配達だったので大変でした。大青田の方へ行く場合、朝出て、局に帰るのは夜の9時、10時になることだってあったものです。今のように区分機がないので、狭いところでの作業はこれも大変でした。

特に、年賀郵便のある師走は、局ではさばききれないので局長の家へ持ち込み、広い座敷でカルタとりのようにしてやったものです。平面で分けするのだから、能率だってよくありません。だから大みそかは不眠不休の状態です。また郵便車もないので、1日6回柏駅までリヤカーを引いて、上り3回、下り3回、定められた時刻に受け渡しに行きました。

配達のほかに、貯金、保険、それと電信、



柏郵便局員の集合写真（昭和11年4月20日）

電話業務もありました。電話の交換もここでやっていて、当初交換台は1台で、加入者は60人ほどだったと思います。たしか1番が郵便局、2番が「㊤市場（まるなかいちば）」。女子は3~4人いて、保険と電話交換をやっていました。宿直では男子が交換業務にあたりましたが、電報もあるので2人以上の宿直が必要となり、しよっちゅうまわってきたものです。

戦時中は職員が次々に召集されたので、かわりに女子と高等小学校卒業したての子供が採用されました。昭和19年頃になると電話交換と郵便の局内作業はすべて女子の仕事になり、“郵便配達婦”も2人誕生しました。

電話事情は、昭和25年頃になってきわめて悪かったです。回線は大分増設されましたが、加入者から東京へかけるのに半日も1日もかかりました。これが大変だからと、「至急」でかけると料金が倍になり、「特急」だと3倍になります。相手に意思を伝えるのなら汽車で行った方が早いし、電話があってもあまり便利という感覚はありませんでした。通話を申し込むといつつながるかわからないので、どこにも行けずヤキモキします。便利というより電話に対する不平不満の方がしきりでした。

昭和33年新局舎ができ、このとき電話と電信業務が電々公社に移管され、郵便業務も近代的になりました。

III 東部14部隊と戦後開拓

齋藤清さん（大正7年生まれ、男性）

聞き取り：昭和55年（1980）12月

根戸へ移駐 私は、昭和12年（1937）に北区赤羽にあった近衛工兵連隊に入隊しました。16年に大東亜戦争が勃発すると、この連隊は通称「東部14部隊（正式には近衛工兵連隊補充隊）」になりました。そして18年7月に、根戸の高射砲連隊の地に移駐。

目的は補充兵の訓練とか、戦地へ送るための部隊編成でした。実際、シナ、南方や沖縄など各地へ「〇〇隊〇〇」というように、補充部隊を編成してどんどん送り込んだものです。

赤羽から根戸へ移駐したときは、御真影や軍旗も移すのでガードの下は絶対にくぐらないよう道順を考えて気を使いました。

十余二の鴻の巣を14部隊の作業所（演習場）とするために買収しました。そこで道路の構築とか、ざんごう掘り、散兵訓練、陣地構築とかの訓練を、ずいぶんやったものです。利根川や手賀沼で渡河訓練もやり、手賀沼では根戸から舟で渡って、沼南町の鷺野谷へ夜中に集まったことを覚えています。

やはり高射砲連隊の跡地に入った83部隊（歩兵隊）も、14部隊とほぼ同じころの移駐でした。その場所には桜並木があって、春はきれいだったことを思い出します。正門から入って桜並木の右側に兵舎が建っていて、私のいた本部は一番手前にありました。

終戦まで 昭和19年頃大火があって、その兵舎1棟が、そっくり焼けてしまいました。私は営庭で慰霊祭をやっている最中でしたが、火事だと聞いて駆けつけました。2階建ての兵舎は延べ600坪ぐらいで、2階から火がでました。消防施設も不備だったことは確かですが、これだけ大きなものだからどうしようもありませんでした。

終戦まで訓練と補充隊の編成、送り出しをしていましたが、私は19年の終りか、20年の初め頃千倉へ転戦して、館山で終戦を迎えました。

20年3月、空襲があって、ここの作業所にバラバラと焼夷弾しょういだんが落ちました。雪の日で、たまたまその日は市原からこちらにきていましたが、ひどい目にあいました。

また、終戦直前に農耕隊を組織したことがありました。食糧の自給というので、営庭の遊休地や近くの農地を借りてイモなどを作ったものです。布施弁天の先の土手づたいの一

町歩ぐらいのところや、十余二の方とかも借りて作りました。

戦後の開拓 戦後、農耕隊で希望者を募り、鴻の巣に開拓団を組織しました。残ったのは10軒で、私も引き揚げてきて、これに加わりました。鴻の巣は70町歩ぐらいありますが、そのうち40町歩の開拓を目標に取り組みました。しかし、10人ぐらいではどうしようもありません。田中村で二、三男を10人あつめ、計20軒で開拓に着手しました。

そのころは松と雑木、カヤがうっそうとした獵場のような所で、カモ・ガン・野ウサギなどがいたものです。開拓は緻くわしかなかったので大変でした。自給できるまで、政府から融資があって食いつないだ状況でした。昭和23年、自作農創設で売り渡されましたが、中には転居した人もいたようです。根戸高野台の方の開墾地に残ったのは83部隊の人たちでした。

IV 花野井青年団「不忍池での田植え奉仕」

Kさん（昭和5年生まれ、男性）

聞き取り：昭和55年（1980）年11月

田中村青年団花野井支部は、太平洋戦争の終戦直後の食糧難で苦しむ戦災孤児せんさいこじの救出のため、上野しのばずのいけの不忍池を水田にして、水稻すいとうをつくったことがあります。

私も青年団員として最初から最後まで参加しました。その頃は、学校を卒業すると青年団に入団させられて、結婚しても25歳までは抜けられませんでした。

田植え奉仕をすることになったのは、この地域に住んでいる人が「東京には戦災孤児がたくさんいて何ともかわいそうだから、米のご飯を食べさせてあげたい」と言いだし、東京にいる大学時代の友人にもちかけたことがきっかけと聞いています。

奉仕活動は昭和21年（1946）春から始められました。行って見て驚いたことに、不

忍池周辺は焼け野原になっていて、ところどころ焼け残りの柱などでこしらえた掘立小屋が立っていました。映画館と本郷の方へ行く通りには、類焼をまぬがれた家が4～5軒残っていました。

青年団は2班に分かれ、まず池の水の吸出しから始めました。その頃はまだ水がたくさんあったので、周辺の消防ポンプを動員して水を汲み出しました。消防自動車のほか手押しポンプも使い、10日ぐらいかかって、きれいに吸み出して水田にしました。

次は田植え。花野井での田植えが終わってから残った苗をもちより、トラックに積んで運びました。トラックは軍で使っていたもので、多いときには10台ぐらい動員し、苗や農耕具、団員を運んだものです。サイドカーなども苗運びのときに使いました。社会奉仕というので車の手配ができたのでしょう。

あるとき、こんなことがありました。トラックを連ねて上野に向かっていたら、葛飾橋(江戸川)でおまわりさんに止められましてね。定員以上の人員が乗り、何台も連なっていたのを怪しまれたらしい。高松宮様からいただいた「許可証」を見せましたが、信用してくれません。すったもんだのすえ、やっと解放されました。

田植えは280人の団員が半数ずつ、交代で行いました。もとは池だったためにビンのかけらなどがあり、怪我をした人もずいぶんいたと思います。怪我をしたら、地元の人が手配してくれて東大病院で治療してもらいました。



奉仕活動による田植えの様子(昭和22年)

秋の収穫のときも、田植えと同様、半数ずつ稲刈りから脱穀、モミ摺りまでしました。これらはだいたい、千束(台東区)の小学校校庭が使われました。収穫のときは田植え以上に大変で、脱穀機や発動機を3、4台も運んだものです。

最初の年は、肥料が多すぎたためか、あまりとれませんでした。ただ、おもわしくなかった収穫も2年目からとれるようになり、最高によかった年は玄米で80俵もとれました。ひどい食糧難の頃でしたが、お米を盗む人はいなかったと思います。

米は台東・千代田区をとおして、親のない子供たちに分けてもらいました。不忍池で作られたのは水稲だけでしたが、さつま芋や里芋なども団員がもちより積んでいきました。

こんなことから農林大臣表彰を受けました。それが新聞で報道されると、千葉県内の他の青年団から応援したいと申し出があつて何度か来たことがあります。また花野井支部だけでなく、田中青年団としても何日かやっただし、村からの応援もありました。

農林大臣表彰を記念して、その年の夏にこちらでお祭りをやりましたが、大臣から金一封が届いたものです。表彰は大臣室で行なわれ、私も役員と一緒にいったし、区長も同席されたと思います。

東京の地元の人たちからも感謝されました。上野松竹館は焼け残って興行していましたが、団員たちは作業が終わると、「田もも引き」のまま映画を見に行きました。もちろん無料でしたし、泥だらけの「田もも引き」の姿でしたが、いやな顔もせず歓迎してくれたものです。

一番印象に残っているのは神田明神の祭りに招待されたことです。台東区と千代田区で招待してくれたものですが、翌年にはお礼に花野井の香取神社の祭りに招待しました。

高松宮様が見にこられたことがあり、記念写真も残っています。

【第1部 語り手】

[平川善仁さん]

昭和19年(1944)花野井生まれ。田中小学校・中学校、取手第一高等学校卒を経て、明治大学卒。昭和37年柏市役所入庁、秘書課、社会教育課、消防本部、企画調査課、商工課、北部整備部、都市計画部などに勤務。平成16年(2004)定年退職。

[齋藤敏文さん]

昭和29年(1954)十余二鴻の巣生まれ。ご両親は開拓地に入植した農家。団地が生まれた後は、同地で文具店、ビル業を営む。松葉町商店会会長、鴻の巣ふるさと会館の運営委員会委員長を務めている。

【執筆分担】

はじめに 上山 和雄
第1部Ⅰ松葉町の概略 櫻井 良樹
Ⅱ聞き取り調査 文字起こし 事務局
加筆・修正 参 与

第2部Ⅰ戦前期の箕輪の生活 差波亜紀子
Ⅱ柏郵便局 大関 隆次
Ⅲ東部14部隊と戦後開拓 大関 隆次
Ⅳ花野井青年団「不忍池での田植え奉仕」 大関 隆次
加筆・修正 浦久 淳子

【柏市史編さん委員会】

柏市史編さん委員会参与 上山 和雄
櫻井 良樹
竹島いわお
浦久 淳子
(～R6年度)小林 康達
事務局 生涯学習部長 宮本さなえ
文化課長 吉田 敬
主幹 大滝 典子
専門監 江藤 隆博
副主幹 本間 寛康
主査 池 亜季
主事補 久村 実花

柏市戦後史聞き取り集 vol.1

【第1部】松葉町

【第2部】過去の聞き取り調査から

公開日 令和8年(2026)5月31日

編集 柏市史編さん委員会

発行 柏市教育委員会

千葉県柏市大島田48-1

電話 04-7191-7414
